

学生の学びの成果を生かした地域貢献の可能性

一手作り段ボール遊具による地域の子どものとの触れ合いを通してー

仙台白百合女子大学 人間発達学科 講師 千 凡晋



1. はじめに

現在勤務している学科は保育士・幼稚園教諭・小学校教諭の養成課程であり、筆者は2018年から造形関連の授業を担当しています。本学科では1年次の後期に「子どもと造形A」、2年次の前期に「子どもと造形B」が必修科目として設定され、両授業を通して保育・教育の現場で活用するために必要な造形活動の実技演習を行なっています。

毎年、「子どもと造形A」の1回目のガイダンスで本学科1年生に高校で選択した芸術科目の状況を調べていますが、何故か美術を選択した学生は1割も満たないです。この傾向は本学科の学生のみに見られる特徴かもしれませんが、中学校の卒業以来、美術関連の表現活動をやっていない多くの学生の状況を踏まえて、「子どもと造形A」を履修する学生が本授業を通して子どもの造形表現に関する理解を深めながら造形活動を行うことで、表現する楽しさを再び味わうことができるように努めています。要するに、「子どもと造形A」は保育・教育の現場での活用を念頭におき、子どもの表現活動や遊びを支援するために必要な造形活動に関する知識・基礎技能の習得を目的とし、学生は身近な画材・素材を探索し、道具の扱い方などを体験しながら作品の製作を行います。具体的にはハサミ、カッター（デザインカッターを含む）、クレヨン、サインペン、紙類、折り紙、水彩絵具、紙粘土、自然物（落ち葉や木のみなど）、リサイクル材（主に段ボール箱）など、保育所・幼稚園・小学校で多く使われている材料・道具を用いて乳幼児から小学生までの子ども達と共に楽しめる造形活動を体験します。

本稿では、その内、段ボール箱による手作り遊具の題材を中心に述べたいと思います。

2. 手作り段ボール遊具の製作活動について

1) リサイクル材としての段ボール箱

今日、リサイクル材は本来の用途が終わった使用済みのものでありながら、再生可能な資源としてその活用が重視されています。子どもの造形活動においても造形表現・遊びの材料としてリサイクル材を活用する例が増えています。その一つである段ボール箱は運搬・保護などの用途のために機能が加えられた軽くて丈夫な紙材です。ネットでものを買う機会が増えている昨今、我々の日常生活の中で配達されたものが増える分、段ボール箱も相当の量が貯まります。またはスーパーなどのお店でも無料で譲ってもらえるなど、いつでも手軽に入手できるものです。

段ボール材はライナというフラットな紙に波状に形成された中しんの紙が挟まれて作られます。その製造の工程により、角度によって曲げやすくなったり、紙でありながら強度が非常に強くなったりします。厚みによっては切りにくい場合もあるし、水や火に弱いという弱点があるものの、折る、切る、貼る、さらに絵の具などで彩色することができるなどの特性から子どもの造形表現・遊びの材料として多く利用されています。端的に、小学校の図画工作科の教科書（開隆堂出版・2020年発行版）をざっと見ただけで、「へん身だんぼーる（『図画工作3・4上』p.45）」「つながれ、広がれ！だんぼーる（『図画工作3・4下』pp.16-17）」「だんボールで試して、つくって（『図画工作5・6上』pp.38-39）」「つながれ、広がれ！だんぼーる（『図画工作3・4下』pp16-17）」など、段ボール箱がメインの材料として提示されている活動が確認できます。そのため保育者・教諭を目指している学生が養成課程で本材料を使った製作を経験することはその後の保育・教育の現場で活かすことに繋がると思います。

2) 製作の構想から完成まで

「子どもと造形 A」で段ボール箱による手作り遊具（以下、「遊具」と記載する）を製作する題材は、毎年11月の中旬からはじめ、計4回の授業時間を使って実施されます。次の節で詳細に述べますが、出来上がった「遊具」は本学の近所の保育所などにクリスマスプレゼントとして寄贈することを目的としているため、12月2週目には完成を目指して開始日を設定しています。

この製作活動では4～6名程度の学生が一つのグループとなり、各グループは一種類の「遊具」の製作に取り組みます。製作のために大量の段ボール箱が必要となるため、本授業のガイダンスで段ボール



学生の製作活動の様子 (2020 年度)

な材料と道具を提供したり、手を貸して一緒に作業したりするなど、学生主体の製作活動が円滑に進行できるようにサポートを行います。

「遊具」製作の活動を実施して 3 年目、様々な種類の「遊具」が製作できました。2018 年度はおママごっこで使える厨房器具から、大型パチンコ、魚釣、迷路、ガチャガチャなどが 12 点の「遊具」が製作されました。

2019 年度はアンパンマン輪投げ、ロッキングチェア、ゲートボール、ボール投げ、玉入り、迷路、お菓子の家、アンパンマン電車ごっこ、魚釣など、10 点の「遊具」が完成できました。

2018 年度に製作された「遊具」(一部)



2019 年度に製作された「遊具」(一部)



2020 年度は Covid19 の感染対策として、学生専用のフェイスシールドを用意し、毎回の授業でそれを着用させながら、不要のおしゃべりは控えるように指導を行いました。また、学生の手はもちろん、造形室のテーブル、使った道具類の消毒なども徹底的に行いながらグループ活動を実施しました。



2020 年度に製作された「遊具」

その結果、(写真の上左から) 迷路、カバさんの輪投げ、ボール投げ、クレーンゲーム機、動物バース、(写真の下左から) 人形の家、ソファ、ハンドル持ちの乗り物ごっこ、キャタピラ、ストラックアウト風のあて、プラネ

タリウムといった「遊具」14点が製作されました。特に上記で示した「収納性」の観点も十分に反映され、「遊具」のほとんどが狭い空間に収納できる組み立て式で作られました。

③鑑賞会

「遊具」が完成されるとグループごとに製作方法や遊び方などを実演しながら発表する鑑賞会が開かれます。製作方法だけではなく製作中の苦勞、それを改善するために工夫した点などを発表する



2020年度発表会の様子（クレーンゲーム機の説明）

ことで、製作したグループだけではなく、他のグループの学生にも製作経験を通して学んだことを共有し、お互いの学びを深めるように努めています。

3. 段ボール遊具を通して地域の子どもを喜ばせること

2006年の教育基本法の改正に伴い、大学の社会における役割として地域貢献の目的が加えられました。以降、各大学は地域社会との関わりを積極的に図りながら、地域連携の取り組みを大学のアピール要素として掲げています。当然、その成果を上げるのに大学教員の活動が求められています。保育者、また幼稚園・小学校の教諭を養成する学科の教員として地域貢献できる要素を考えると、キーワードはやはり「子ども」、そして「造形活動」です。筆者も年に何回か保育所・幼稚園に出向いて子どもや保育者を対象に造形活動・遊びの実践を行っていますが、筆者個人の活動に留まらず、学生を交えて学生の学びの成果を地域に発信する意味で、「遊具」を通して地域の子ども達を楽しませることも地域貢献に繋がると考えております。しかし、本学科に着任し、「子どもと造形A」のシラバスを構想する段階では「遊具」の製作とそれを寄贈する活動を地域貢献に結び付けることはできませんでした。学生が苦勞して作るものを製作後に解体して、ゴミとして処分することはもったいない、その活用方法として子ども達に遊ばせれば良いという単純な思い付きで取り入れた内容です。また、保育者・教諭を目指している学生達にとって「遊具」を使ってくれる確実な対象がいることにより、構想段階から「遊具」に対するイメージを具体的に掴みやすくなるし、安全性はもちろん子どもが好むものを作りたいという製作意欲の向上に繋がると考えました。その狙いは実には的中していて、製作する学生はもちろん指導する私も子ども達に危ないもの、すぐ壊れるもの、面白くないもの、可愛くないものを渡したくない、また下手な

ものを現場の先生に見せたくないなど、質を高めたいというモチベーションの向上に良い働きかけになっています。

2018年度はA保育園との日程調整により2019年1月末に「遊具」12点を子ども達に渡しました。参加した6名の学生と私は持ってきた「遊具」に対して子ども達が興味を見せてくれるか、喜んでくれるか、不安が大きかったです。しかし、その心配は無用で、5歳児の子ども達と園の先生達、皆が喜んでくれました。現場で子どもと触れ合う機会があまりなかった学生達から「遊具」を通して子ども達と遊ぶことが



できたことに満足感とやり甲斐を感じたと言われました。その1回目の交流がきっかけで本活動を通じた養成課程と現場との連携、地域貢献への可能性を意識することになりました。(関連記事：

https://sendai-shirayuri.ac.jp/news/20190204_165602.html)

2019年度は2019年12月中旬、T認定こども園の5歳児クラスの子ども達に「遊具」10点を渡しました。2019年度は前年度の経験もあり、地域の子供達を喜ばせる、楽しませる、現場の先生達に保育中に活用できる遊具を提供する、現場と養成課程との連携を深めるなど、本活動が持つ地域貢献としての役割をより強く意識し、交流活動を行いました。参加した4名の学生達はサンタさんとトナカイの格好で、子ども達に「遊具」プレゼントし、子どもの遊びを援助しながら一緒に遊びました。学生からは子ども達が自分達で作った「遊具」を持って楽しく遊ぶ姿を見て、保育者という夢の願望が

より強まった、苦労したけど作ってよかったなどと言われました。



(関連記事：https://sendai-shirayuri.ac.jp/news/20191226_183602.html)

2020年度は2021年2月初旬にK保育園の4歳児クラスの子供達に「遊具」14点を渡すことができ

ました。Covid19の影響で寄贈することが実現できるか不安もありましたが、K 保育園の協力の下で遊具の組み立て方と遊び方を子ども達と園の先生に実演しながら説明することを通して交流を図りました。（関連記事：https://sendai-shirayuri.ac.jp/news/20210215_133305.html）



遊具を通じた子どもとの交流（2020年度）

4. おわりに

2020年度の「遊具」製作においてあるグループの例を挙げ、本稿を閉じたいと思います。そのグループは計画書を構想する段階から一番心配のあるグループでした。作りたいアイデアはあるものの、段ボール材に対する理解もなく、製作工程に対する具体的な見通しも欠けていました。しかし、私に積



グループの活動（プラネタリウムの製作）の例

極的に相談をし、メンバー同士で意見をまとめながら工夫を重ね、最終的には素敵なプラネタリウムを作り上げることができました。毎年、このような学生の成長を通して筆者自身も学び続けています。

「遊具」の製作という題材を通して学生がリサイクル材の活用というエコの側面を理解することはもちろん、多様な材料を取り入れることで表現の幅が広がることを分かってほしいと思います。また、学生が「安全性」、「耐久性」、「収納性」を考慮しながら子どもが喜ぶ遊具を製作するためにグループのメンバー同士でアイデアを出し合い、協力し、そのアイデアを形のあるものに具現化していく過程を通して学びを深め、完成した「遊具」により達成感と満足感を味わってほしいと思います。何より、学生が「遊具」を通して子どもを喜ばせ、楽しませることが与えるやり甲斐、苦労はあったけど作ってよかった、造形活動って楽しいと感じてほしいと願っております。

これからも「遊具」の他にも、学生の学びの成果を地域に還元できる活動を見つけ、進めて行きたいと考えています。

稚拙な文章でございますが、最後までご高覧頂きましてありがとうございました。